

歴史から見たロシア・ウクライナ 関係と今後の展望

元ウクライナ大使 黒川祐次



はじめに

私は1996年から1999年までの3年弱の間、ウクライナ大使を務めた。私はこの地域の専門家ではなかったが、赴任してみるとこの国が想像していたよりもはるかに大きな国で、しかも独自の歴史とユニークな民族を持った国だということがわかった。

ところが日本では、ウクライナという国はとも以下のように把握されていたようだ。すなわち、ウクライナは元々ロシアの一部だったのが、たまたま1991年のソ連の崩壊により、ソ

連を構成する15の共和国が棚ぼたのようになんか独立してできた国の一つといった程度の認識だったと思われる。換言すれば、ウクライナは基本的にはロシアと同質の国なので、その独立はそれほど必然性のあるものではなかったようだということだ。日本に届くウクライナに関するニュースもモスクワ経由が多く、当然のごとくロシア・バイアスがかかっていた。

キーウに住んで、私はこれは違うと感じ、ウクライナから見たウクライナの歴史を書こうと思ったって、いろいろ調べて2002年に中公新書『物語

ウクライナの歴史』を出版した。

今回のロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、国連憲章をはじめとする国際法に真っ向から違反する侵略行為であり、決して許されるものではない。ロシアとしてもそのくらいのことにはわかってはいるはずである。それにもかかわらず、なぜこれほど明白に法、正義そして人道に悖る行為をロシア、またプーチン大統領が強行したのか。これは単にウクライナをめぐる現在のヨーロッパの勢力関係を分析するだけでは十分わからないのではないか、やはり入りくんだロシアとウクライナの関係

の歴史を見なければよくわからないのではないか。

本稿では、紙面の制約もあるので戦況については省略して、前半においては、なぜプーチンは侵攻に踏み切ったのかをロシアとウクライナの歴史の絡み合いの観点から見ていく。また後半においては、今後の見通しとこの戦争から見えてきた事実と問題点について触れたい。

1. ウクライナとロシアはどこが違うのか？

(1) キーウ・ルーシ大公国が共通の先祖

現在のロシア、ウクライナ、ベラルーシ3国の共通の先祖は、10〜11世紀に栄えた東スラヴ民族最初の大国である「キーウ・ルーシ大公国」である。都はキーウ（キエフ）だった。

キーウ・ルーシは初めてキリスト教（東方正教会、ロシア正教会）を受容した。そのためキーウはロシア正教の発祥の地とされ、ロシア人にとっては心のふるさととなっている。

なお、当時モスクワは地図にも載らないような北方の辺境の寒村であった。ところが13世紀にモンゴルが襲来し、

大公国の中心であるキーウは陥落して、同大公国は分裂状態となる。キーウを中心とする現在のウクライナ地域の荒廃は著しく、リトアニア、ポーランドなどの近隣国の餌食になってしまった。

ただ17世紀には、近隣諸国の支配下にあったウクライナにおいても、荒れはてて無人地帯になっていたその地に近隣諸国の過酷な支配から逃れてきた人々が住みつき、コサックという共同体を形成した。コサックは自衛のために武装したが、次第に強力となり、一時は事実上の独立国を形成した。短期間ではあったが、それが後のウクライナ民族の誇りと精神的拠りどころになっている。

その間、北方の小国だったモスクワ公国が台頭し、地域の強国にのし上がっていった。それにつれて、モスクワはルーシの後継者を自称し、国名も「ロシア」（ルーシのギリシャ語形）と変えて、名実ともにルーシの後継者とな

ろうとしていくことになる。

そしてモスクワ（後のロシア）は17世紀後半よりウクライナを侵蝕し始め、18世紀末のエカテリーナ女帝の時代にはウクライナの大部分を支配下に収めた。「分家が本家を乗っ取った」形だ。以来、200年以上ウクライナはロシア帝国およびその後身のソ連に支配されることになる。第一次世界大戦の混乱期にウクライナは独立運動を起し、短期間独立を達成したが、まもなくボルシェヴィキに潰され、ソ連を構成する一共和国となる。そして1991年のソ連崩壊によりウクライナはようやく念願の独立を達成することになる。

(2) なぜウクライナはロシアに征服されたのか？

なぜキーウ・ルーシの中心であったウクライナの地が、かつては辺境だったモスクワに呑み込まれてしまったのか。それについては以下の3点が指摘される。

①専制体制をつくったモスクワ（後の

ロシア)が先に強国になった

専制国家は分権的な国家より国力を集中できるので、強い国家になりやすい。モスクワおよびその後身のロシアは専制体制を身につけ、それを代々の君主が受け継いだため、隣国より強い国になり、近隣地域を併合していった。なぜモスクワが専制的になったかについては、以下の説がある。

一つは、モスクワは長く遊牧民族に支配されて、リーダーに従う遊牧民族的な習性を身につけたというものだ。二つ目は、早い時期から他民族を支配していたので、専制的にならざるをえなかったというものだ。三つ目は、専制を取り入れたモスクワ(後のロシア)が成功したため、そのモデルが代々引き継がれたというものだ。そして四つ目は、ソ連時代に共産主義のプロレタリア独裁で補強されて、専制指向が一層強固になったというものだ。

②ウクライナは地の利が悪かった、また同時に土地が豊か過ぎた

ウクライナの地は、中・南部はステッ

プ(草原)地帯で、遊牧民族が必ず通る道にあり、頻繁に蹂躪された。その点、ロシアは北部の森林地帯にあって遊牧民の関心が薄く、被害が比較的少なかった。これが、ウクライナの独立のためには地の利が悪すぎたという意味だ。

土地が豊か過ぎたということは、そのステップが黒土地帯で地味が豊かであり、近隣の垂涎の的となったという意味だ。古代・中世はもちろんのこと、近・現代になると、北からはロシア、南からはオスマン、西からはリトアニア、ポーランド、ドイツなどに侵略され、また支配された。

つまり、ウクライナは常に周辺の民族や国家から狙われ、占領されたため、独立するための余裕が与えられず、出遅れてしまったのだ。西欧でいえば、独・仏に挟まれたベネルクスやアルザス・ロレーヌ地方に似ている。

③専制体制を好まなかったウクライナでは、長続きする世襲王国ができなかった

キーウ・ルーシ大公国は分権的で、

ゆるやかな諸侯の連合体だったため、モンゴルに一致団結して対抗できなかった。ウクライナは、この専制を好まないキーウ・ルーシの気風を受け継いだのではないか。また一時期、コサックは国家に近いものをつくったが、その首長は選挙で選ばれ、解任もされた。当時、世襲の王のいない国は近隣国から独立の国家と認められず、他国の庇護を求めなければならなかった。その間に、近隣国は専制の世襲国家となり強力になっていった。つまり、ウクライナは専制的にならなかつた、または専制的になれなかつたために出遅れ、その間に先に専制的になったロシアに征服されてしまったということであろう。

ウクライナは第一次世界大戦中に一時独立したが、独立を永続的なものにするワシントンや毛沢東のようなカリスマ的な「建国の英雄」は現れず、独立は長続きしなかつた。

1991年の独立後も、長年の帝政・共産主義支配下にあったにもかかわらず、自由・民主主義がすぐ定着した。選挙も比較的公正で、政権交代も行わ

れた。その代わり、独立後、開発独裁も生まれず、経済発展が遅れた。ここでもキーウ・ルーシやコサツクの伝統が引き継がれているのではないかと思われる。

(3) ウクライナを取り戻したいロシア

ロシアは実利面、精神面の両面からウクライナを取り戻したいと考えている。

実利面では、ロシアが大国になれたのはウクライナを取り込んだからだという人さえいる。ソ連時代でも、ウクライナはソ連の産業・人材供給などの面で大きなシェアを占め、不可欠な存在だった。現在のロシアでも、衰退傾向にあるロシアを超大国に戻すにはウクライナを再びロシアへ引き戻すことが必要だとの意見は根強いようだ。

精神面では、ロシアはウクライナを2世紀以上支配していたため、ウクライナを自国の一部と思い込んでしまった。ところが1991年のソ連崩壊で、そのウクライナが突然離れてしまい、欠落感をぬぐえないでいる。特に歴史の点では、「キーウのないロシア」は「京都・奈良のない日本」のようになって

しまい、古い歴史を持つ由緒ある大国と言いつらくなってしまった。宗教の点でもロシア正教発祥の地であるキーウがないと精神的にも落ちつけない。結局、ロシアは栄光あるキーウ・ルーシの正統な後継者と名乗るためには、キーウのあるウクライナがないと困るのだ。

(4) ロシアから離れたいウクライナ

上記に対して、ウクライナ人は以下のように言う。

①ロシアとウクライナは似ている面も多いが、違う民族なので独立して当然だ。その証拠に、ウクライナは何世紀もロシアからの独立のために戦ってきた。独立したこともある。一度独立した民族はもはや昔の隷属に戻ろうと思わない。

②ロシアは、自分がルーシの後継者なのでウクライナはロシアの一部だとするが、キーウのあるウクライナこそがルーシの正統な後継者だ。

③今のウクライナは価値観も欧米に近い。ウクライナには自由や民主主義が定着しているが、ロシアにはない。ま

たロシアのような専制主義も大国主義もない。

④ウクライナの将来を考えても、ロシア式の政治・経済の下ではウクライナに未来はない(特にこの意見は若者に多い)。ロシアと一蓮托生にはなりたくない。

⑤国際法上も、1991年の独立以降、ロシアはウクライナの独立と国境の保全を条約で何回も約束してはいないか。⑥これまでロシアとの協調に努力してきたが、クリミア併合と今次侵攻で限界を越えた。

(5) ロシア人とウクライナ人の国民性の比較

共通点としては、逆境に強い、歌・詩が好き、大雑把、男はマッチョ、女は家庭的が好まれる、等々の点が指摘される。

ロシア人の国民性としては、暗い、哲学的、空想的、集団主義、独裁を許容、暴力的などと言われ、ウクライナ人は、明るい、抽象論に関心がない、現実主義、個人主義、一致団結しない、

独裁嫌い、などと言われる。ロシア人をドイツ人、ウクライナ人をイタリア人に比する人もいる。

2. なぜ今回プーチンは軍事侵攻したか？

前述の一般的なロシア人のウクライナ観を一層先鋭化し、ウクライナをロシアに取り込むことの正統性を理論化しようとしたのがプーチンである。

(1) プーチンの歴史観

プーチンは根っからのKGBで、子どもころからKGBに憧れてきたようである。彼の柔道好きもKGBと無縁ではないようだ。

KGBはソ連の諜報機関であるが、ソ連のイデオロギーには関心がなく、その使命はもっぱら大国としてのソ連をリアリズムの観点から守るといふことであつた。プーチンもこの考えに全く同化しており、彼は共産主義の凋落には慚愧の念もなく、もっぱらソ連という超大国が凋落してしまったことを悔しく思っており、ロシアを超大国に

復帰させたいと思っているようだ。具体的には、以下が彼の考えだと思われる。

- ①ロシア帝国とソ連が世界の超大国だったことに大きな誇りを持っている。
- ②その大国ソ連は1991年に崩壊したが、これは西側に仕掛けられたもので許せない。
- ③今のロシアは衰退傾向にあるが、その挽回が自分の歴史的使命だ。ピョートル大帝に並びたい。
- ④旧ソ連の版図の回復が大目標だが、その第一段階は最も重要なウクライナを取り戻すことだ。
- ⑤ウクライナは本来ロシアの一部なので、それを取り戻すことは他国への侵略ではない。

(2) なぜ今侵攻か？

プーチンは、NATOの東方拡大、ジョージアのバラ革命、ウクライナのオレンジ革命、キルギスのチュリーップ革命などにより、ロシアが追い詰められているとの危機感を強め、反撃が必要との感を強めていった。その最初の反撃

が2008年のジョージアの南オセチアへの侵攻であり、次の大きな反撃が2014年にウクライナのマイダン革命をきっかけとして起きたクリミア併合、ドンバスへの軍事介入であつた。

このクリミア併合、ドンバス介入はプーチンとしても大きな賭けだつたと思われるが、あつけないほどの成功であつた。ウクライナ軍は無抵抗だつたし、米欧からの対露制裁も耐えられる範囲内であつた。

これに自信を得たプーチンは次の機会をうかがっていたのであろう。その準備の一環としてウクライナ併合を歴史的に正当化するために、2021年7月に『ロシア人とウクライナ人との歴史的な一体性』という「大論文」を発表した。ここでは、ロシア人とウクライナ人は同根で、同民族であり、ウクライナの主権はロシアとのパートナーシップの中においてのみ可能であることなどが延々と論じられている。こうして侵攻の理論的準備を完了して、侵攻時期を決定した際には以下の考慮があつたと推察される。

一つ目は、クリミア併合の成功体験だ。前回同様ウクライナ軍は大した抵抗もできないだろう。ゼレンスキー・ウクライナ大統領はしょせんコメディアンで、すぐ逃げ出すだろう。したがって今回も数日でキーウを制圧し、ゼレンスキー政権を打倒して、傀儡政権を樹立できるだろう。

二つ目は、一番気になる米国の反応だが、バイデンは弱腰だし、また彼は中国を主要敵としているので欧州の問題に国運を賭してまで対抗してこないだろう。

三つ目は、ゼレンスキーが反露政策に転じNATO加盟を急ぎ出したので、早めに止めないといけない。

四つ目は、2024年に自分の大統領選挙があるので、その時期から逆算する。

3. 今後の見通し

大きなことは戦争でしか決着しない。そして戦争で決着した結果は、平和時にこれを交渉で変更することは極めて難しい。これが歴史の冷徹な教訓である。

もしウクライナが領土の一部をロシア側に占領されたまま和平協定を結んだ場合、和平後にロシアはその領土返還の交渉に乗ってこないだろう。またいったん、和平ができる、味方も含め世界はウクライナのことを忘れてしまふ。朝鮮戦争がよい例であり、休戦協定はできたが朝鮮半島はその後何十年も分断されたままだ。

ウクライナ側もこのことは肝に銘じてよく知っている。中途半端な和平で終わっては、これまでウクライナ側が大きな犠牲を払ってここまで戦ってきた意味がない。また何世紀にもわたって続けてきた対露独立の闘いを、米欧などの軍事援助と国際世論の支援がある間に最終決着させたい。これがウクライナの人々の悲願であろう。

他方、ロシアも難しい立場にある。

ウクライナの戦闘力や士気、それに米欧などの対ウクライナ支援を見誤った。しかしロシアもせっかく彼らの「大義」を唱えて戦争を始めた手前、何も得ないでは自ら止められない状況に陥っている。そうなった場合にはプーチンは地

位どころか自分の身さえもどうなるかわからない。ロシアは当初の目標を下げ、最低限度面子の保てる南部4州（旧ノヴォロシア）、あるいはもっと譲歩してドネツク2州の完全掌握でも和平をしたいところかもしれない。しかし、そうなればウクライナは勢いづいて、そこで矛を収めることはないだろう。

予想されているウクライナ側の春の大攻勢がどうなるのが分岐点になる可能性もあるが、ロシアは基礎体力がある国なので、低レベルの戦闘を継続する力はあるだろう。いずれにせよ、戦闘ないし外部で何か大きな出来事が起きない限り、戦闘が続かざるをえないように見える。

4. 今次戦争が明らかにした事実と問題点

この戦争はまだ終わっていないし、今すぐ終わる見通しも立てにくい、これまでもわかってきたことがある。そのいくつかを紹介して締めくくりとしたい。

(1) ロシアという国の真の姿が明らかになった

ロシアという国は半ば閉ざされた国であるので、その実態はいろいろ想像されてきたが、今次戦争でやはりそうだったのかという事実が確認された。そのいくつかをあげる。

ロシアは、19世紀、または20世紀前半の世界観・戦争観を持ち続ける時代遅れの国であることがあらためて確認された。

ハードの面では資源と武器以外は国際競争力がなく、軍事大国だが、経済小国といういびつな構造を持つ国だ。ソフト面では世界を納得させ、リードする価値観を持たない国でもある。結局、物質面でも精神面でも魅力のない国だということを示した。だからこそ、衛星国だった東欧諸国も、ソ連に組み込まれていたウクライナもバルト3国も皆、ロシアから逃げ出し、EU、NATOに入りたがった。これはロシア自身の失敗が招いたことで、自業自得だ。

強そうに見えた軍も案外弱いし、結局、核で脅すしか手段のない国だ。

「巨大な北朝鮮」のようだ。

また国際的にも、真の友・同盟国のない寂しい国だ。力でしか他国を動かせない国でもある。

そしていくらでも嘘をつく国、自己正当化を図るために平気で詭弁を弄する国だ。かつて岡崎久彦氏は、日露戦争以前のロシアの外交を調べて、「ロシアの言葉は無視し、その行動のみで判断せよ」と述べたが、それは今でも正しい。

そして最後に、ロシアは本心ではより欧州的なロシアの実現を望んでいるのに、逆に欧州を敵に回し、内心は望んでいないのに中国への依存を一層深めざるをえないという皮肉な結果となっている。これではロシアの衰退は不可避だろう。

(2) ウクライナという国が初めて世界で認知された

ウクライナという国は独立後、日も浅いこともあり、これまで特に注目されてこなかった。2014年のクリミア併合の際、あまりにも無抵抗だった

ため、評価はむしろ低かった。

それが今回の戦争でウクライナが潜在的に持っていた底力が独立以降初めて発揮された。コサックに代表される歴史的なウクライナ人の独立心、不屈の精神が復活したし、ゼレンスキー大統領の勇氣とコミュニケーション能力に皆が驚いた。

独立後の経済は低迷を極めたが、それでも兵士のレベルがロシア兵よりもかなり高いことが証明された。ウクライナが教育熱心であることは一部で知られていたが、この戦争で証明された。特に理数系のレベルは高く、AI駆使能力が戦果にも影響している。AI担当のフェドロフ副首相は「ウクライナのオードリー・タン」と呼ばれるほどである。民生面でも、ウクライナは「東欧のシリコンバレー」という人もおり、平和到来の折にはIT産業が花咲くであろう。

国際安全保障の面では、ウクライナは、自分の戦争を戦っていると同時に、「欧州の盾」となって戦っている側面もある。ウクライナがロシアの勢力圏

に戻ってしまふことになれば、ヨーロッパ全体の安全保障は極めて脆弱であることが危惧される。その面からもウクライナの重要性はあらためて認識されたと言つてよいであろう。

(3) 西欧、特に独・仏の「平和ボケ」

がかなり是正されたがまだ不十分

これまで独・仏はロシアに遠慮して、米国が提案したウクライナのNATO加盟提案に反対してきた。もし加盟させていれば、今回の侵攻は起こりえなかっただろう。独・仏は2014年のクリミア併合にも微温的な反応しか示さなかった。さらには、ロシアに有利なミンスク合意をウクライナに呑ませた。これがロシアを付け上げさせた一因になった。

侵攻後、独・仏の態度はかなり変わったが、内心ではあまり変わっていないと思われるふしもある。

このウクライナの問題は本来ヨーロッパの問題であり、ヨーロッパが主体性を持って解決しなければならぬ問題であるにもかかわらず、弥縫策に傾き

がちであり、そしていざとなれば米国に頼るとの昔からの傾向は変わっていない。

(4) 大国による核使用の脅しが初めて

現実の問題となった

NATOやEU全体のGDPはロシアより圧倒的に大きく、通常兵器だけの戦いならNATO側は勝てるのに、「核で脅せば大国もひるむ」がかなり効いた。

米欧側は、ロシアがいざとなったら核を使う用意があるのか、それともそんな気はないが通常兵器の戦争では勝ち目がないので使うふりをしているだけなのかよくわからないという状況に振り回され、対露強硬策を手控えてきた。ロシアはこの手を今後も使い続けるだろう。

もしこの脅しがこのまま世界に通じるのなら、核の脅しを使っても大きなお咎めなしということになり、世界の秩序にとり大きな脅威となる。核の拡散も起こりかねない。どう解決していかわからないという極めて深刻な問

題である。

(5) 国連が機能しないときに、戦争を防止する方法はないのかという問題を突き付けた

世界の平和を守るために創設され、それを守るのが最大の任務である国連が、安保理常任理事国が他国を侵略した場合には何もできないということを経験した。世界はあらためて知らされた。しかし今回のように誰から見ても憲章違反明らか白々の侵略行為が、拒否権があるからといって見逃されるようでは、そもそも国連の存在意義が問われることになるし、現実には世界の平和も維持できないことになる。

残念ながら、これに対する明快な対策はない。目下のところは国連総会が侵略国に非難決議を出すか、国際刑事裁判所が逮捕状を出すのがせいぜいのところである。この二つはすでに出されておき、国際法的・道義的にどちらに非があるかを明らかにする点では大きな意義はあるが、侵略を抑止したり、始まった戦争を止めさせるほ

どの力はない。さらに、前述の核の脅しと同様、これも真似をする国が出てきかねない。

5. 日本とウクライナの意味合い

この戦争は遠いヨーロッパの戦争ではあるが、日本にも大きなインパクトを与えている。

(1) 日本の安全保障体制をあらためて考えさせられた

まず日米安保条約の重要性をあらためて再認識させた。これは、私が2014年キーウで会った元ウクライナ外相が、「日本は日米安保があって羨ましい」と言ったことから明白である。確かに、ウクライナが2014年当時にNATOに加盟していたなら、このような侵略行為は起こらなかったであろう。またウクライナは専守防衛、非核三原則を遵守してきた国で、その面では日本とよく似ている。戦争を回避するために必死の外交も行った。それでもウクライナは侵略された。これは日本にとっても厳しい現実である。

さらに、自らも戦ってこそ外国の支援を得られることもわかった。クリミア併合時にウクライナは戦わなかったので国際社会の支援を十分得られなかった。今回はウクライナ自身が必死の覚悟で戦っている。はじめは及び腰だった米欧も、これを見て本格的な軍事支援に乗り出した。日本では日米安保があるから米軍に守ってもらえばいいという雰囲気は支配的だが、それでは日米安保さえも機能しない恐れがある。

(2) 欧州とアジアの安全保障が連動してきた

日本は遠いヨーロッパの戦争でも、国連憲章に明白に違反する侵略行為として強くロシアを非難し、ウクライナを支援し、G7やヨーロッパ諸国との連帯を表明している。権威主義的な大国と近接していることは東アジアもヨーロッパも共通している。つまり安全保障上もヨーロッパと東アジアの状況は似ているし、ヨーロッパと同様なことが東アジアでも起こりかねない。そういった場合、価値観を共有する日本と

ヨーロッパが協力し合うことは有意義である。功利的に言っても、欧州で貢献しておけば東アジアでの有事の際に欧州の支援を期待できるだろう。

(3) ウクライナはヨーロッパにおける大親日国になる

ウクライナは以下の点ですでに親日国である。

① 独立以来の日本の対ウクライナ支援は、ODA、その他の金融支援、チャルノービリ支援など相当額にのぼっており、ウクライナ人はそれをよく知っている。

② お互いに共通の隣国ロシアに領土を占領されていることからくる連帯感がある。

③ ウクライナは日露戦争時からすでに親日だった可能性がある。これはまだ十分実証されていないが、当時、ウクライナはロシアからの独立を望んでいたため、内心では日本を応援していたが、ロシアの一部となっていたのでそれを公言できなかったのではないかと。現にロシアの隣国で、ロシアに苦し

められていたフィンランド、ポーランド、トルコは、東洋の小国日本が日露戦争でロシアに勝利したことで元気づけられ、それ以来、大の親日国となって今日に至っている。私はこれを「ヨーロッパの親日ベルト」と名づけているが、ウクライナもこの列に加わるだろう。

(4) 意外に日本の近くにいるウクライナ・ディアスポラ

19世紀末から20世紀初頭に当時のロシア政府は、ロシア極東地方（ウラジオストクヤハバロフスクの地域）を農業で開拓するために多数のウクライナ人を移民させた。その移民はロシア人よりウクライナの方が多かった。それは農業で開拓するためには自立農民の多いウクライナ人が適当と判断したからのようだ。彼らが住んだ土地は「緑のウクライナ」とも「ウクライナの楔」とも呼ばれた。

第一次世界大戦、ロシア革命の混乱時に同地のウクライナ人は独立を模索し、議会をつくり、大統領を選び、軍隊まで組織したが、結局はボルシェヴィ

キに潰されてしまった。革命後も多くのウクライナ人が旧満州のハルビンなどに避難して、同地の日本軍に協力を求めた。日本側も関心を持ったが、結局何が実ることはなかった。

この事実は、最近日本およびウクライナの双方で研究が進んでおり、その接触の状況が明らかになりつつある。

今もロシアの極東地方の「ロシア人」はウクライナ系が多数派だと推察されるが、彼らがどの程度ウクライナ人の出自を意識しているかは不明だ。いずれにせよ、遠い存在だと思われるウクライナ系の人たちが案外近いところにたくさんいるということは興味深いことである。

（2023年3月23日・公開講演会）

筆者略歴（くろかわ ゆうじ）

1944年愛知県で出生。1967年東京大学教養学部教養学科国際関係論分科卒。1967年外務省入省。1994年在モントリオール総領事。1996年駐ウクライナ特命全権大使（1999年7月まで）。199

9年衆議院専門委員兼外務委員会調査室長。2001年駐コートジボワール特命全権大使（2004年11月まで）。2004年11月外務省退官。2004年12月ウクライナ大統領選挙日本監視団団長。2005年日本大学国際関係学部兼同大学院教授（2014年8月まで）。その間、学部次長、大学院国際関係研究科主任、日本大学評議員などを務める。

現在、「ウクライナハウス・ジャパオン」共同代表、日本コートジボワール友好協会会長、キール国際大学名誉教授、千代田国際言語学院名誉院長。

著書：『物語 ウクライナの歴史——ヨーロッパ最後の大国』中公新書、2002年。『The Impact of Globalization on Japan's Public Policy, The Edwin Mellen Press, USA, 2008.（共著）。『現代国際関係の基本文書』日本評論社、2013年（共著）、他。